

## 人間のぬくもり感じる 新鮮な野菜を



「じねんの会」代表

日野詢城



「じねんの会」の代表・日野詢城さん(46)。  
最初は失敗も何度かあったという



旅館前の野菜売り場に人だかり。「由布院の野菜づくり農家グループ、おいしい自然野菜を……じねんの会」と書いてある。「なんや、ここへ野菜買いにきたみたいや」とおじさん。ギャルが水で冷やしたトマトをかじる。「わあ、おいしい、これがほんとのトマトの味ね」

「じねんの会」が有機農法で栽培した野菜の袋には、全て産者の姓名、電話が書いてある。

「野菜のほんとうのうまさを解っている人だけを相手にするのでなく、不特定多数の人と縁を結びたい」という実験農業は矛盾や悩みをかかえながら「じねんに（自然に、ゆっくりと）歩み始めている」。



▲出荷する野菜は必ずその日の朝に。「本当のトマトの香りがするでしょ」と河野加津恵さん

▼「農業はまず土づくりから」と河野朝男さん。牛を飼い、その完熟厩肥を使うと虫がつきにくいという

湯布院を訪ねた夜、真宗大谷派見成寺の庫裡で「じねんの会」の例会が開かれていた。集まった二十数名の中には農家の人たちだけでなく旅館の亭主、板場、観光総合事務所所長らもまじって午後11時ごろまで熱心な談合がおこなわれた。「この夏は暑かったせいか、思ったほど売り上げはのびなかったが、昨年よりは30%増えた」と代表者の日野詢城住職が報告。すかさず「頭をまるめなあかね」「わしはもうまるめとるよ」でドッと笑い。

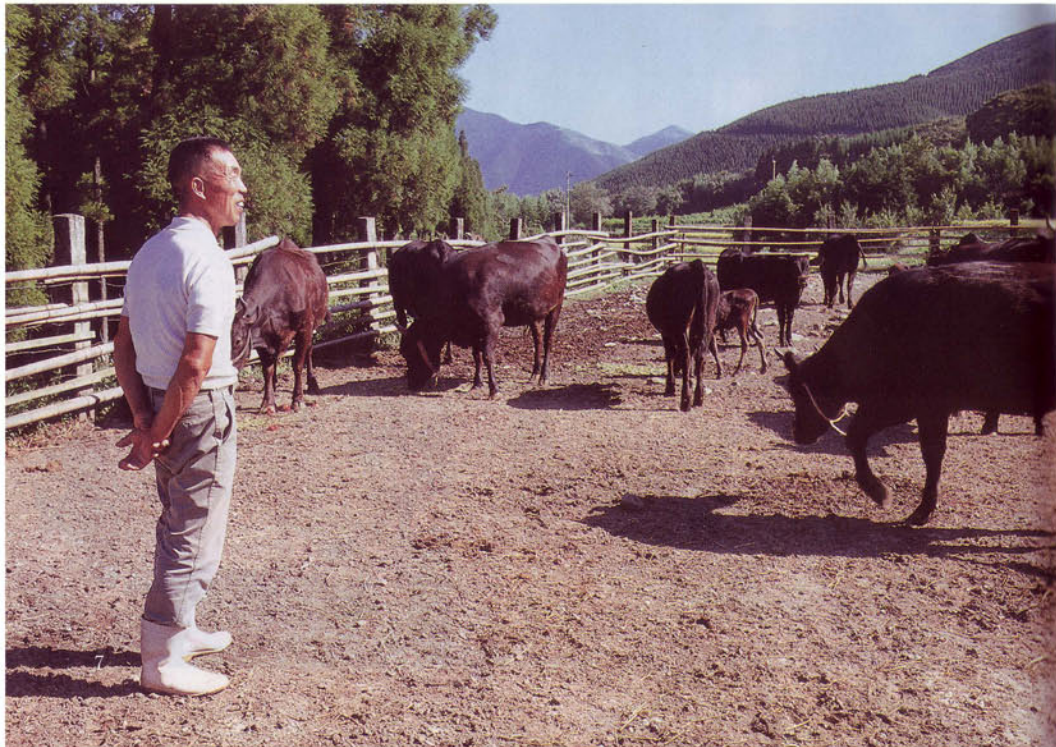
スタートして6年目になる「じねんの会」は、現在会員数が約60名。農業の荒廃が指摘され、展望をうししない、後継者難に悩む声は列島にあふれているが、それを乗りこえたい人たちは「この町から農が消えちゃダメだ。農の中にマットウで楽しいものがあるはず」「農も仏教も、いのちの根っこをつかみ直すことでは同じ」と、身乗りだす。



▲例会には毎回20名前後の会員が集まる



今年はじめて試作したピーマンを手につれしそうな河野孝子さん(▲)。現在、全会員で100種類もの野菜を作っている





▲旅館亀の井別荘の主人・中谷健太郎さんは、よき相談相手。同会がこの町にとって、どれだけ重要かを教えてくれた人だ

▼毎年末には、その年つくった米や野菜、地鶏などで、試食会を兼ねた忘年会も  
(写真は日野さん提供)



今年5月、日野さんはロック歌手の喜屋武マリーさんをよび平和と自然保護を訴えるコンサート(▲)を行った。また、年2~3回行う研修会では、会員の人たちと熊本の菊地農園(竹熊宜孝さん。'86年2月号で紹介)の養生祭(▶)に参加したことも(写真は日野さん提供)

# 自分のイノチキと 子どもの未来を考える



「土が弱っていると虫がつきやすいです。それがわ  
からなくて最初失敗しました」

な農業をやるうとか、大金持ちを目指して  
るんじゃないんです。〃わしらで考える農業  
の道〃を一步一步、じねんに探ってゆこうと  
いうことにあるんです。農業は危険だから何  
とか工夫してね。除草剤もいたからタニシも  
ドジョウも死にじまった。農薬使っても5〜  
10年は何とかもつのですが、土が弱ってくる。  
初めのころのように効かんから濃度を強めて  
ゆく。劇薬に近い量を使わんといかん。風下  
や河川を汚染させて公害をまきちらす。何と  
か、なしていいけんのか。多少、虫喰いであつ  
ても、人間のぬくもりが感じられる、食べて  
うまい、安全で土の香りと汗の匂いが脈打っ  
ている新鮮な野菜をつくって、湯布院の農家  
と地元の人、この町を訪れる人々が一体とな  
れるような野菜づくりをしようというのが、  
じねんの会なんです。ごく普通の、ごく足も  
とのことをやろうというわけなんですよ」

——その普通のこと、簡単にできないわ  
けでしょう。

## まず〃土づくり〃から

——ディスクで踊っていた青年に、女の子  
が「あんた何やってんの？」と声かけられて  
「おれ、百姓」と答えたら、「あつ、そう」  
で話が途切れてしまっただそうです。また、  
農家の若い奥さんは、パートで働きに出て、  
帰りにスーパーで野菜を買ってゆくんですつ  
て。こんなどこか狂っていますよね。マト  
モじゃないですね。

「お年寄りがその姿をみて、ウチの畑に生  
つとるのにとブツブツ言いながら実に淋しそ  
うな顔をするんです。淋しくない農業を自分  
たちで何とか考えられんものだろうかとね」

——〃自分のイノチキ(食べてゆくこと)と  
子どもの未来を考える〃農業集団「じねんの  
会」が誕生したのは84年と聞きました。6年  
目ですね。

「じねんの会は、とんでもないほどの高度

「そうなんです、そこなんです。この普  
通のことが今の農業の仕組みの中では成り立  
っていきにくいんです。たとえば有機農業は  
作物をつくるより前に土をつくらにゃいかん。  
完全な土をつくるには10年かかるといわれる  
んだけど、湯布院には千二百頭の和牛がいる  
し、地鶏を飼うことによって、畜産と結びつ  
いた農業サイクルも可能なんです」

——土づくりの前に、堆肥づくりから始め  
なきゃいかん。それは、たいへんだなア。

「牛や鶏の飼料から考えなきゃいかんの  
ですよ。フンになる前をね(笑)。疲れた土  
を何とか生きた土にするだけで5年はかかる  
んです。ひとにぎりの土の中に何億というバ  
クテリアが棲息していて、みごとにバランス  
をとっている。それをめちゃめちゃにこわし  
てしまった。昭和30年代から大量に農薬を使  
ってきた結果なんです」

——いい方法はあるんですか。  
「あります。昔ながらの農業です。完熟堆

## ひの しゅんじょう

1944年生まれ。真宗大谷派見成寺住職。「じねんの会」代表。大分県在住。

——というのは？

「たとえば核シェルターのような存在にはしたくない。核シェルターの中におれば確かに安心で安全かもしれないけれど、さし迫った問題をみんなで考えて乗り越えてゆこうという気力が退化します。わかっている人だけが相手に、善人同士のつき合いグループになつてはいかん。こわいのは、親鸞聖人が言われたように、善人というところに立つたらいかんかね。やつとらん人や文句をいう人も含めていかないと、問題や矛盾は解決しません。ですから、完全性をあえて言わず、あいまいをよしとしてるんです。でないとお突破できなくなるんですよ。特定のごちんまりしたサークルの中で楽しくやるよりは、共に毒を喰らいながら少しずつ平成の土一揆を実行してゆきたい」

——日野さんは住職。自ら「百姓坊主」と名告っておられますね。

「じねんの会の着想は旅館亀の井別荘の中



会員は早朝、それぞれ自分の作った野菜をたんねんに袋づめてならべる

肥をつくれれば虫はつきません。それがわからず、2年目の時、失敗しました。確かに食の文化、農のあり方を問う私たちの有機農法はあまりにも重労働を強いられます。完全な土をつくれれば、スーパーなどで売られている野菜の何十倍も栄養価の高い、おいしいものが

つくれるのですが……。キュウリでも農薬使ったものは冷蔵庫に入れておくと中が白くなつてきますが、じねんの会のキュウリはみずみずしい。この卵も、黄身を箸でついてもなかなかくずれないでしょう」

——ほんとか。こりゃよさそうだ。

### 地球にやさしく したたかに挑む

「でも、まだまだ問題はあるんですよ。つくっても、責任もつてはかせること（販売）ができるのか。それに今は産地のないレトルだけの有機野菜も出回っている」

——買い手というか消費者のホンモノとニセモノを見分ける目、認識を育ててゆくことも大切ですね。

「販売の方法も、どこかの流通と結託すればラクなんですが、じねんの会では細々とでいいから不特定の方たちに買ってもらいたいと考えているんです」

谷健太郎さんに依るところが大きいし、農家の河野朝男さんら、プロの農家の人たちの、現代社会がかかえるゆがみやひずみを何とか解決していかなければといううねりに支えられています。20代の青年から80代のおじいちゃんまで

——見成寺の門前に15アールの畑がありますね。鶏も飼っておられる。

「野菜も30種ほどつくっています。『百姓百作』というのにはおよびませんが」

——いい土ですね。踏んで足の裏からわかりますよ。むろん作物もいい。

「ばあさんに小さい時から道に落ちてる馬フンを拾わされたのを覚えてましたからねえ。昨今、長野やあちこちの農業先進県といわれるところから研修にこられる。今の若者が生きている、燃えていると実感できる喜屋武マリーの、愛・自由・自然を訴えるロックコンサートもやったり……。地球にやさしく、したたかに挑んでいるんですよ」